

2人の後継者

創業者に限らず、経営者にとって、最も重要な仕事は次の経営者を決めることだ。

創業者の場合、自分の子ども、それも息子を後継者にできれば

私の履歴書

江頭 匡一
えがしら きょういち

29

幸せだろう。だが、主治医から五十歳まで生きられないと言われてきた私にはできなかつた。その年には息子の繁明はまだ十六歳。後を継がすためには、本来、後継者としての人格と力量を見極め、トップとしての訓練を施すべきであるが、年齢的にできるはずもなかつた。

息子にはこう言った。「江頭家は継げるけれど、ロイヤルは年を考えると継がせられない。自分で食べていくことを身につけなさい」と。彼も四十四歳になつた今は理解してくれているが、本人が周りから「なぜおやじの後を継げんのか」と言われ、悩んでいたのを知っている。

私は若いころ、二十歳以上も年の離れた方から大変良くされた。そのご恩返しと考へ、各地

の経営者の子息十数人を預かつて、商人として親元に返すまで教育をした。こうした「預かり組」は親の後を継ぐにしろ、独立するにしろ、目的意識が明確で、他の社員より熱心に仕事に取り組んでいた。

「預かり組」から稲田氏 見込んだ榎本氏とコンビ

福岡空港店や、繁盛店の責任者を任せ、成田の東京新国際空港店の開業のために、ロサンゼルス空港のホストインターナショナル社に留学させた。その後、メニュー企画や経営全般の仕事

をさせているうちに、十年が過ぎ、九二年に副社長、そして翌年社長に就いてもらった。

その中の一人として稲田直太君は六八年、慶応大学卒業と同時に親代わりで、当時、横河電機社長だった横河正三氏から頼まれて入社した。彼はレストラ

ンを一生涯の仕事と決め、在学中からレストラン研究会を主宰しており、独立するまでの三年余り預かるという約束だった。彼の生家は、横須賀の連合艦隊御用達の食品納入業者で、おばあさんが、連合艦隊の山本五十六司令長官もしばしば足を運んだという著名な料亭・小松を営んでいた。

若いころから独立したときに役立つようにと、当時最新鋭の



稲田直太社長⑤、榎本一彦会長⑥と（ロイヤル沖縄空港店で）

福岡シティ銀行に入り、福岡地所をつくった。

以来二十数年間、榎本君は社外役員を務め、毎月の役員会に出席、経営にも参加してくれた。そして副会長を経て九七年、福岡市内の複合商業施設、キャナルシティ開業を機に会長を受けてもらい、私の望む稲田社長とのコンビが誕生した。

からお付き合いをしており、彼が生まれたときも産湯につからせるほどの間柄であった。

子供のころからのガキ大将で何をやらせてもリーダー的な役割をしていた。高校生になるころには、「できたらこんな青年をロイヤルの後継者にしたい」

という夢をもつほどだった。六六年に慶応大学を出て、当時の日本不動産銀行（現日本債券信用銀行）に入ったが、当時の湯藤実則頭取と食事をした際に、「昨日の入社試験で、あなたと仲の良い四島司さん（福岡シティ銀行頭取）のおいごさん

二人とも長年一緒に仕事をやってきたおかげで、私が何を考えているか、お互いよく理解しあえている。安心して将来のことを二人に任せられるだけに、創業者としての大事な任務を果たしたと考へている。

（ロイヤル創業者取締役）